



Tomás Kintsuba



Diego Yuki

キリシタン時代の司祭像に学ぶ

付・日本カトリック神学院の養成理念と指針

企画編集 日本カトリック司教協議会 常任司教委員会



Julián Nakaura



Pedro Kijbe

キリシタン時代の司祭像に学ぶ

付・日本カトリック神学院の養成理念と指針

企画編集 日本カトリック常任司教委員会

カトリック中央協議会

目次

溝部司教『キリシタン時代の司祭像に学ぶ』へ寄せて

日本カトリック司教協議会会長 岡田武夫（東京大司教）……………5

キリシタン時代の司祭像に学ぶ

日本カトリック列聖列福特別委員会委員長 溝部 脩（高松司教）……………7

日本カトリック神学院の養成理念と指針

日本カトリック司教団……………19

表紙画 三牧権子
ペトロ岐部と百八十七殉教者肖像画より

溝部司教『キリシタン時代の司祭像に学ぶ』へ寄せて

ベネディクト十六世教皇は、二〇〇九年六月十九日の「イエスのみ心の祭日」から、一年間を「司祭年」とすることを定められ、わたしたちは、今、「司祭年」を過ごしております。日本のカトリック教会では、昨年、ペトロ岐部と一八七殉教者の列福式が行われ、大きな恵みの年となりました。この列福式で福者に列せられたかたがたの中に四人の司祭が含まれています。彼らの姿から、現代の日本に求められている司祭像を学ぶことは意義深いことと思ひ、日本カトリック司教協議会では、列聖列福特別委員会委員長の溝部脩司教に、福者になられた司祭の姿に光を当てた「司祭年」にあたっての文書作成を依頼しました。

折しも、本年四月から、東京と福岡の二つの神学院が一つになり、新たに「日本カトリック神学院」がスタートしました。司祭の生涯養成とともに、司祭になる過程での神学生の養成も大変重要です。本書には、溝部司教の文書の中でもたびたび引用されている、「日本カトリック神学院の養成理念と指針」も収録しました。今一度、司祭、修道者、信徒の役割について学ぶための資料としていただけますと幸いです。

溝部司教は『キリシタン時代の司祭像に学ぶ』の結びで次のように書いています。

「神の民―教会」をつくりあげていく過程の中で、司祭が果たす役割は大きい。司祭年にあたって、叙階の秘跡による位階的司祭職と洗礼により与えられる共通司祭職について、教会の中で司祭と信徒が話し合う機会を設けていただきたい。

まったく同感であります。司祭と信徒が司祭職について考え話し合い祈ることが必要であり大切です。それにしてもキリシタン時代の司祭像が何と鮮やかに描かれていることでしょうか。それと比べて現代の司祭像には鮮明さが欠けているように思われます。

時代が違うとはいえ次の言葉は、司祭、信徒が大いに考えるべき指摘でありましょう。

この時代、司祭の務めは秘跡を授けることだけに絞られていたと言ってもよい。司祭たちは日本全国津々浦々にある小さな共同体を訪問し、ミサ聖祭をささげ、ゆるしの秘跡を授け、信徒を励ましたのであった。こういった中で信徒は司祭の役割を理解し、その他のことは自らの手で行った。その分司祭は秘跡を執行することによりのを賭けることができた。典礼を大切にす教会、秘跡に生きる司祭、これらこそ教会を刷新する原動力と言ってもよい。

本書を読みながら、教会において現代の司祭の役割と信徒の役割についてよく話し合い、それを新しい教会建設のために霊的な力の刷新の契機としていただきたいと切望します。

二〇〇九年九月

日本カトリック司教協議会会長

ペトロ 岡田 武夫（東京大司教）

キリシタン時代の司祭像に学ぶ

日本カトリック列聖列福特別委員会委員長
溝部 脩 (高松司教)

福者ペトロ岐部司祭と一八七殉教者の中には四名の司祭が含まれている。さらに、聖トマス西と十五殉教者の中には三名の邦人司祭、日本二〇五福者殉教者には五名の邦人司祭が含まれ、そのうちの一名は教区司祭である。十二名すべての横顔を挙げて司祭殉教者の靈性を取り上げることが容易でないので、今回は記憶に新しい一八八殉教者の中の四名の司祭を取り上げ、その司祭としての生き方に注目し、現代に生きる司祭たちへの指針として提示したい。^①執筆にあたっては、今年度(二〇〇九年)統合によって新たに発足した日本カトリック神学院の『養成理念と指針』において謳われている、目指すべき司祭像を参考にした。なおこの書簡は、日本に働くすべての司祭のためであるととも、司祭を育てる務めを持つ信徒にもあてたものである。

(1) 『日本カトリック神学院の養成理念と指針』(以下『養成理念と指針』)は、「歴史の中に神のメッセージを読み取る」という一項目を掲げてキリシタン時代の教会が果たした役割を簡潔に述べている(第二部B4)。

1 よき牧者

司祭殉教者の最大の特徴は、苦しむ羊を探し求めて歩く牧者の姿である。いずれの司祭も、いずれかの土地でよき司祭として生活し、司牧の仕事に当たり、それなりの評価を得て生涯を終えることができる才能の持ち主であった。にもかかわらず、あらゆる苦難が予想される中で迫害に苦しむ信者に仕える道を選んだ。ペトロ岐部は過酷な旅の末ローマで司祭となったが、日本へ戻り、九州から東北まで信徒を訪ね歩いた。デイエゴ結城も追放された信徒を津軽まで見舞ったことがあり、捕らえられた後、一人山中に住んでいたと役人を納得させ、信徒に取り調べが及ぶことを防いだ。トマス金鍔次兵衛は馬丁となって役所に潜入して牢内の信徒を励まし、巧みに搜索を逃れ、長く生きて信徒に奉仕しようとした。ジュリアン中浦の司牧範囲は九州全般に及び、迫りくる迫害の中で、修道司祭として生涯を神と人々にささげることを誓って生きたのである。

牧者は他人のために自分を捨てて仕えることを旨としている。自らの便宜と安全を優先させて生きるならば、牧者としての務めを果たすことはできない。「友のために自分のいのちを捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ15・13)とあるとおりである。牧者として生きるためには、他人に仕えるという信念と情熱が求められる。それはいのちを捨てても惜しくないというほどの情熱である。^②

教皇ベネディクト十六世が称賛する聖ヨハネ・マリア・ピアンネ司祭も、キリシタン時代の司祭た

ちと方法は異なるが、信者の靈的必要にすべてを賭けた点においては、まったく同様である。

(2) 『養成理念と指針』では、キリストに従った使徒たちのように全部を投げ打って生きることを目標とし

て掲げている。「全き献身、これこそ司祭に求められる理想の姿である」(第一部A2)。

2 観想と活動の調和

四名の司祭たちに共通している点は、徹底してキリストの生き方をしたということである。それを支えたのは、自分でことをなすのではなく、ことを成就させてくださるのは神であるという信念であった。そのため、活動に先立って必ず祈る習慣を彼らは持っていた。中浦は迫害の最中で自らを奉獻するという約束を文章に表した。岐部は日本に向かう直前に「神の恵みに信頼して帆を張る」という表現を使っている。「観想と活動の調和」、これは現代の教会の最大の課題である。活動にのめりこんで祈りを忘れれば活動の実りはない。同様に活動に結びつかない祈りは単なる自己満足に過ぎない。教会に仕える司祭こそ日々祈る習慣をしっかりと身につける必要がある、養成課程においてそれを習慣づける⁽³⁾。イエスも活動する前に必ず祈っている。祈る司祭の姿が見えないと言われる昨今、司祭は

祈るキリストに心して学ぶ必要がある。みことばを日々味わい、それを実行する司祭職には実り多い宣教が約束される。

司祭がいかに必要であっても、キリシタン時代には、決して安易な司祭養成へとは傾かなかつた。長い養成期間を経て、靈的に成長し、宣教の技術を身につけてから司祭へと叙階されていった。養成課程の中で、司祭として生きるという確固たる不断の精神が培われたのであり、これがあつてこそ、迫害の時代、司祭として人に奉仕することを徹底できたのである。司祭殉教者が一過性の職業意識ではなく、神と人との生涯を賭けて生きるという確信に満ちた奉獻を選んだことを強く心に留めなければならぬ。

(3) 『養成理念と指針』は、「キリストに学ぶ」として「もっとも深い内的生活において、生涯、友としてキリストに一致する」という『司祭の養成に関する教令』のことばを引用している(第一部B1)。

3 秘跡に生きる司祭

キリシタン時代は過度の司祭不足の時代であった。しかし、教会は司祭職への養成を簡略化してや

みくもに司祭の数を増やす方法をとりはしなかった。むしろ時間をかけて司祭を養成する道を選んだ。さらに、それと並行して信徒の養成にも力を注いだ。米沢の殉教がそのよき例である。多くの小さな共同体をつくり、それを信徒自らの手で守っただけでなく、大きく発展させたのであった。この時代、司祭の務めは秘跡を授けることだけに絞られていたと言ってもよい。司祭たちは日本全国津々浦々にある小さな共同体を訪問し、ミサ聖祭をささげ、ゆるしの秘跡を授け、信徒を励ましたのであった。こういった中で信徒は司祭の役割を理解し、その他のことは自らの手で行った。その分司祭は秘跡を執行することにいのちを賭けることができた。典礼を大切にする教会、秘跡に生きる司祭、これらこそ教会を刷新する原動力と言ってもよい。⁴⁾

(4) 『養成理念と指針』は、『教会憲章』を引用して典礼の重要性を語っている。「典礼は、教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である」(第一部C2)。

4 教会共同体の中心である司祭

司祭は一人孤独の中で生きることができない。生涯を司祭として全うするには神の助けが必要であ

ることは言うまでもないが、それに加えて司祭どうしの兄弟としての交わりが不可欠である。金鏝は来日するや否や、まずモラレス神父を訪ねている。岐部は深い友情の中で、松田神父とともに来日を実現させた。中浦は眼前に広がる島原の海を見つめながら、同僚のクラスト神父の最期を看取った。迫害は司祭たちの友情を深め、そのきずなを強くした。司祭殉教者の姿は、うらやましい程の友情に満ちている。司祭叙階式において、司祭団によってなされる新司祭を受け入れる意志の表明、それは単なる儀式ではない。司祭たちが労苦を分け合い、祈りをともにし、共同で責任を分かち合って教会をつくりあげることの意味⁵⁾している。

司祭団の交わりと同様に、司祭は信徒との交わりを何よりも大事にしなければならない。キリシタン時代は司祭が過度に少なかったからこそ、逆に司祭と信徒の交わりには深いものがあつた。司祭が負う任務は教会共同体を霊的に高めていくことである。今日、日本の教会では信徒が種々の分野で活躍し、教会を引っ張っていくようになってきている。その中で司祭は、信徒の働きを認め、運動や活動を助け、励ます役割を担⁶⁾う。同時に、信徒は自分たちには司祭を育てる務めがあることを忘れてはならない。信仰に満ち溢れた共同体からはよき司祭が生まれるし、よき司祭はよき共同体を生み出す。信徒との交わりについては、キリシタン時代の教会が実に多くの示唆を与えてくれる。

キリシタン時代には、司祭のチームワークがとれず、自己の特権を主張したことから、当時の日本の教会を混乱に陥れた側面もある。諸修道会間の争いなどがその顕著な例である。こういったことが

らも現代の教会への警告となすことができる。特記すべきは、司祭殉教者たちはこれらのスキャンダルを承知の上で、日本の教会を愛し、信者のためにいのちさえもささげる道を選んだのであった。教会の弱さは決して彼らの召命を失わせはしなかった。

(5) 『養成理念と指針』では、司教の協力者となり、司祭団との一致に生きる必要を説いている。司祭団の

チームワーク、共同で宣教する必要があります(第一部B2〜3)。

(6) 『養成理念と指針』では、神学生のと時から対話ができる人間になる努力をし、独りよがりの自分だけの宣教は実りが少なく、長続きしないことを学ぶよう示唆されている(第二部B1〜2)。

5 霊的同伴者

殉教の時代にあつて、信者のよりよき識別のために助言、励ましを与え続けたのが司祭殉教者たちであった。難しい判断を迫られたことであろうし、また実際多くのケースにおいて目をつぶるという寛容さも必要であった。人間の弱さも理解し、それでもなお殉教への固い決意を保ち、それを信者にも勧めたのであった。殉教を勧めるためにはどれほどの信念と決意が必要だったことか。中浦が禁教令下の豊前の信徒を訪れ殉教への準備を行ったことなど、その例は数多く挙げるができる。

複雑な現代は、価値観が定まらない混沌とした世界である。それだけに、いかに生きるかを示すことのできる見識と賢明さが司祭には求められている。これを可能とするには、現代社会とそこに生きる人間とを深く理解することが第一である。ある意味キリシタン時代と同じほど不安定な社会にわれわれは生きていたのであつて、このような時代にあつて、確固たる信念を伝える司祭はますます必要となつて⁽⁷⁾いる。

(7) 『養成理念と指針』の「牧職に向けて」の項では、「現代の社会の中で、悩み、苦しんでいる信者に気づき、キリストの温かさをもつて、すべての人に接することができる成熟した人間性を身につける」と説明されている(第一部C3)。

6 普遍教会との交わり

中浦然り、岐部然り、金鰐然り、結城然り、彼らは普遍教会とのつながりを深く意識しており、それを体験することを通してキリスト教の本質に到達することができた。日本の教会の欠点は承知しつつも、教会を愛し、そのためにいのちをささげることができたのは、普遍教会(カトリック)の司祭

であるとの自覚を持っていたからである。カトリック性を身につけていたからこそ、日本人として、キリスト者として、カトリックの司祭として、自分の生涯を生き抜くことができたのである。

普遍教会との交わりという点においては、殉教者たちはローマ教皇に対し特別な尊敬を抱いていることに留意したい。教皇への従順は具体的に司教への従順に表される。司教は教皇により任命されているからである。また、司祭は叙階によって司教の祭司職にあずかっている。毎年の聖香油のミサの中で、司祭は司教とのつながりを強く意識し、交わりに生きることを誓う。これも単なる儀式ではない。司祭は司教の第一の協力者でなければならないのである。⁽⁸⁾

(8) 『養成理念と指針』では「司教の協力者となる」の項で、司教への従順を説いている(第一部B2)。

7 宣教師―司祭

『養成理念と指針』は、どこにでも宣教に赴く気概について語っている(第二部B2参照)。キリシタン時代、迫害で追放された結果であるとはいえ、東南アジア諸国に最初にキリスト教を伝えたのは日本人司祭であるということを忘れてはならない。宣教するという強い気概をキリシタン時代の司祭は

共通して備えている。現在日本の教会は、小教区、教区の枠を超えて協力する方法を模索しているが、その実現には、どこにあっても働くという気概を持つ司祭が不可欠なのである。

最後に

「つぶやかず、疑わず、すべてのことを行え。よこしまな世代の中であって、きよく、まっすぐに、神の子として生き、世界に光を輝かせよ」(フィリピ2・14―15)。

何よりもよろこびをもつて自分に与えられた司祭職を生きることが肝要である。第二バチカン公會議は、教会を「神の民」と定義している。司教、司祭、修道者、信徒が一つになってつくりあげていく「神の民」が教会なのである。「神の民―教会」をつくりあげていく過程の中で、司祭が果たす役割は大きい。司祭年にあたって、叙階の秘跡による位階的司祭職と洗礼により与えられる共通司祭職(『カトリック教会のカテキズム』一五四六―一五四七参照)について、教会の中で司祭と信徒が話し合う機会を設けていただきたい。

日本カトリック神学院の養成理念と指針

日本カトリック司教団

はじめに

「イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった」(マルコ3:13-15)。

父である神から遣わされたイエス・キリストは、神の福音をのべ伝える使命を継続していくため、使徒たちを召し出し、ご自分のそばに置いて養成し派遣された。日本カトリック司教団は、教会の頭かしらであり牧者であるイエス・キリストがなさったように、将来の福音宣教のために司祭の養成をもっとも重要な任務と認識し、その責務遂行の一環として、新たに日本カトリック神学院を設立する。

そのため日本カトリック司教団は、教皇ヨハネ・パウロ二世の使徒的勧告『現代の司祭養成』⁽¹⁾に提示されている人間的養成という土台の上に霊的養成、知的養成、宣教・司牧的養成が行われるように、まず教会が求める司祭像⁽²⁾(第一部)を再確認しながら、日本の社会が求める司祭像を浮き彫りにし(第二部)、それを目指す養成課程をここに提示して(第三部)、日本カトリック神学院の養成理念および指針とする。

第一部 教会が求める司祭

A 神の招きにこたえる

1 神の招きに感謝して

神は人類の救いの計画のために、キリストを通して、ある人を特別にお選びになり、教会への奉仕に生涯をささげるよう招かれる。この司祭職への召命は神のはかりしれない摂理によるものであり、その選びは神の自由な意思によるものである。神は「世の無学な者」を選び、「地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、自分の卑しい者や見下げられている者を選ばれた」（一コリント 1・27―28）と言われているとおりである。

キリストによって司祭職への招きを受け、それに誠実にこたえたいと願う者のために、教会は養成の場を設けている。したがって神学院にあつて何よりも大切にされるべきことは、神学生が神の恵みの中に、自分の召命を忠実に生きることである。神学生は神の選びを受けたことに感謝しながら、神

が自分に何を望まれているかを知り、神の意思に従って自分の生涯をささげる熱意をもって生活する。

2 キリストに従った使徒たちのように

キリストは使徒たちに、ご自分の後に従うよう命じられた。キリストに従うためには、今までの生き方を捨ててかからなければならぬ（ルカ5・11、マタイ4・20参照）。捨てるとは、「すべての人に対してすべてのものとなる」（一コリント9・22）生き方を選び取ることを指す。司祭は自分に死ぬことによつて、すべての人をキリストによる救いへと導く奉仕者となることができる。全き献身、これこそ司祭に求められる理想の姿である。

キリストは召命の道を歩む神学生にも、同じことを望まれている。今までの経歴、学歴、体験に頼るのではなく、神のみ手にすべてをゆだねる信仰が求められる。今までの人間関係を引きずつていては、新しい道を歩み出すことは難しいからである。

3 神の民とともに

司祭職への召命は神の民である教会の中で芽生え、はぐくまれ、教会に支えられて実を結ぶ。叙階式が神の民の見守る中で行われる理由も、そこにある。司祭はキリストの教会に奉仕し、教会とともに働くために叙階される。それゆえ、司祭は教会を愛する者であり、司教や司祭団との交わりを大切

にして働き、また修道者や信徒とも協力して福音をのべ伝えながら教会を築いていく者である。

したがって、神学院が信仰に基づく神の民の交わりを体験する場となることは重要である。真に福音的な共同生活を送った者こそ教会を大切に、将来、司教や司祭団、また修道者や信徒とともに神の福音を伝える者となれるからである。神学生は多くの恩人の支援に感謝しながら、養成者や召命の道を志す仲間とともに親密な共同生活を体験する。

B キリストの司祭となる

1 キリストに学ぶ

キリストを通して神の選びを受けた者は、叙階のときに、聖霊の恵みによって「キリストの生きた似姿」⁽³⁾となり、キリストを彷彿^{ほうぶつ}させる存在⁽⁴⁾となる。そして、頭であり牧者であるキリスト⁽⁵⁾とともに教会に奉仕するキリストの司祭となる。

司祭職を目指す神学生は、「死に至るまで、それも十字架の死に至るまで」(フィリピ2・8) 神に従順であられたキリストに倣う者とならなければならない。神学院の生活は、キリストを求め、キリストを見つめ、キリストに従う日々の連続である。祈り、勉強、そして共同生活も、すべてがキリストに学ぶためのものであるから、司祭職を目指す神学生は、「もつとも深い内的生活において、生涯、

友としてキリストに一致する」⁽⁶⁾靈性を身につける。

そのために神学生は何よりも、キリストが祈りをもって一日を聖化したように、⁽⁷⁾あらゆる活動を祈りの精神で満たすよう心がける。とくに日々の感謝の祭儀（ミサ）をはじめ、教会の祈り（聖務日課）を通して、たえず人々のためにキリストとともに祈り、またキリストの奉獻に合わせて生活の中で自分自身をささげることを学ぶ。また、神学生は個人的な神との語らいや信心業にも親しむように努める。とりわけ神の母聖マリアへの信心を培うことは大切である。⁽⁸⁾キリストの母である聖マリアは、またキリストの司祭を志す者の歩みを見守り、助けてくださるからである。

2 司教の協力者となる

キリストは、弟子たちの中から使徒たちを選び、ご自分の後継者として立てられた。同じように使徒たちは、⁽⁹⁾按手と祈りによって、後継者として司教たちを任命してきた。そして司教たちも、ゆだねられた使命遂行のために協力者を必要としている。それゆえ司教たちは、按手と祈りによって、司祭たちをキリストの祭司職にあずからせてきたのである。⁽¹⁰⁾司祭は司教の第一の協力者であり、司教のもとにあつて、司教とともに労苦を分かち合い、神の民を教え、聖化し、導く任務を有している。

そのために司祭職を目指している者は、神学生時代から司教への従順を学び、司教との深いつながりをもつ。

3 司祭団の一員となる

司祭たちは、司教を頭かしらとして、司教とともに司祭団を形成し、一致協力して司教を助ける。こうして司祭たちは兄弟として交わり、神の国の実現に向けて協働する。^{⑪⑫}

したがって神学生は、将来、司祭団の仲間として協力して働くことができるように、他の神学生とともに学び、生きることを大事にする。それは、チームワークの精神を学び、互いに知恵を出し合い、ともに汗を流して働く姿勢を身につけるためである。

4 信徒に奉仕し協働する者となる

信徒は洗礼の秘跡によってキリストの祭司職にあずかり、神のことばをのべ伝え、典礼に積極的に参加し、愛の奉仕に参加する者である。一方、叙階の秘跡によって役務的祭司職にあずかる司祭は、この共通祭司職のすばらしさを信徒に教え、それを実行するように励まし、信徒と協働して教会の使命を果たす務めがある。^⑬

それゆえ神学生は、教会における信徒の役割について学び、信徒と協力して働く精神を培うようにする。^⑭

C 司祭の役務に向けて

この世にあつてキリストの使命を継続していくように召されている司祭は、神のことばをのべ伝え（預言職）、諸秘跡とくに感謝の祭儀によつて人々を聖化し（祭司職）、神の家族としてのきずなを強め、父である神のもとに導く（王職）使命を遂行する。¹⁵⁾

1 預言職に向けて

司祭は何よりも、キリストに倣つてすべての人に神の福音を告げる者である。また、司祭は神のことばを具体的な生活の状況にあてはめて人々に教え、回心へ導く。そして、信者の生活が福音化され、彼ら自身が福音をのべ伝える者となるよう育て励ます。¹⁶⁾

この教える任務を十全に果たすため、神学生はとくに神のことばに精通する必要がある。神学生は聖書の研究を通して、神のことばの深い理解に努めるだけでなく、日々、聖書を通読し、念禱の方法を体得して深く黙想し、人々と分かち合い、生活の指針として生きることが大切である。

また、キリストによつてもたらされた神からの啓示は、聖書だけではなく、教会の教導権によつて明らかにされ、聖なる伝承となつて現代にまで受け継がれてきた。司祭は信仰の諸真理を忠実に伝え

る使命のために、聖なる伝承、および教会の教導権の教えを正確に学ぶ必要がある。そして、教会の中で営まれ発展してきた神学や、人間の理性によって論拠を明らかにする哲学も、キリストによって啓示された神秘をより深く理解し、体系的に整理して教えるために不可欠である。

したがって神学生は、真理であるキリストをあかしするために、聖書をはじめ、聖なる伝承、教会の教導権の教え、神学および哲学を熱心に学ぶだけでなく、現代社会の人々の心に福音が生きる力として伝わるような工夫を心がける。

2 祭司職に向けて

司祭には、キリストの名において典礼を司式する権能が与えられている。「典礼は、教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である」⁽¹⁷⁾。とくに教会は、感謝の祭儀を通して、日々、いのちを新たにし、そこから尽きることのない力を汲み取っている。

したがって司祭職を目指す神学生は日々、感謝の祭儀をはじめとする種々の典礼祭儀に意識的に参加し、諸秘跡を適切に、また信者の行動的な参加を促しながら、より豊かに執行することができるように、ふさわしい養成を受ける。

3 牧職（王職）に向けて

司祭は、よき牧者であるキリストのように自分のすべてを人々の救いのために与えながら、キリストの愛と力によって、また聖霊の助けのもとに、神の民を一致させ、自分にゆだねられた羊の群れを、父である神のもとに導く使命をもっている。¹⁸

そのために神学生は、現代の社会の中で、悩み、苦しんでいる信者に気づき、キリストの温かさをもつて、すべての人に接することができる成熟した人間性を身につける。²⁰ また、神学院の規律を遵守し、種々の役割を果たしながら営む共同生活は重要である。このような生活環境の中で、神学生は互いに心を開いて語り、協力して働き、包容力のある柔軟さをはぐくみ、教会共同体を導くリーダーシップを身につける。

第二部 日本の社会が求める司祭

A 現代社会の福音化に挑戦する

1 日本の社会に福音を

第二バチカン公会議が打ち出した現代社会に生きる教会の刷新のため、日本の教会は一九八七年に第一回福音宣教推進全国会議（NICEE）を開催した。その答申にこたえて発表した『ともに喜びをもって生きよう』というメッセージの中で、日本の司教団は、「社会の中に存在するわたしたちの教会が、社会とともに歩み、人々と苦しみを分かち合っていく共同体」となるよう希望し、そのために「福音に照らされた諸問題解決の指針」を、教会と社会に広く伝達していかうと呼びかけている。⁽²¹⁾

従来 of 宣教は、キリストを知らない人々に福音を告げて回心へと導き、洗礼を授け、信仰教育を施すこととされていた。しかし、教会の福音をのべ伝える活動には、人間の判断基準、価値観、文化、生活様式を福音化することも含まれている。教会は人々を洗礼に導くだけでなく、社会を変容させ

ていく使命をもっているのである。²²キリストの福音こそ、一人ひとりの人間をその罪から、また社会をその構造的な悪から解放する原動力である。神と教会に奉仕する司祭には、人間の個人的な次元だけでなく、社会の種々の分野に福音の価値観を浸透させ、社会の福音化に挑戦することが求められる。

したがって、現代の日本社会で生きる司祭を養成する神学院においては、養成者も、講師も、神学生も、日本の社会における時のしるしに敏感でなければならぬ。今日の時のしるしは、いのちと人権の尊重、家庭、戦争と平和、科学技術の新しい可能性と倫理上の課題などに顕著に表れている。²³神学院で教える者も学ぶ者も、これらのしるしを福音の光に照らして判断し、そこに神からのメッセージを読み取って、社会に働きかけていく「生きた神学」を心がける。こうして将来の司祭は、信者一人ひとりが現代社会の中で果たすべき役割を担っていくよう、教え励ます者となる。

2 時のしるし—いのちと人権

現代の日本の社会において、顕著な時のしるしの一つはいのちと人権である。教会は第二バチカン公会議の精神に従って、時のしるしに敏感である人々とともに、いのちと人権の課題に積極的に取り組んできた。²⁴日本の司教団も社会の重要な転機にあたり、『平和への決意』（一九九五年）、『いのちへのまなざし』（二〇〇一年）、『非暴力による平和への道』（二〇〇五年）などの文書を発表し、いのちと人権、正義と平和の重要性を訴え、司教協議会においても社会の福音化を推進する組織を充実させて

きた。こうした働きかけは、教会が信頼を得る要素にもなっており、これらの問題に取り組むことで、社会における教会の存在意義が浮き彫りにされている。

したがって神学生は、一人ひとりの人間のいのちと人権を大切に感じる感覚をはぐくむことで、現代社会の諸問題に挑戦する勇氣ある司祭となるよう心がける。さらに神学生は、いのちと人権のテーマが、正義と平和、環境問題、南北問題、貧困と飢餓など、世界的な規模の諸問題への目覚めにもつながっていることを意識する。

3 人々と苦しみを分かち合う

日本の司教団は、社会とともに歩む教会の優先課題の一つとして、「人々と苦しみを分かち合う²⁵⁾」ことを求めている。イエスは次のように教えておられる。「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」(マタイ25・35―36)。この聖書のことばには、苦しむ人々へのイエスの連帯感が如実に表現されている。

経済や効率が優先される社会の中であって、司祭は苦しむ人々に近づき、そのさまざまに困難に共感し、必要な助けの手を差し伸べる賢明な牧者であることが求められている。⁽²⁶⁾

そのために司祭職を志す者は、苦しむ人々や貧しい人々と出会い、彼らに学び、彼らと視座をと

にするために、社会問題に関する学習会、ボランティア、清掃奉仕、募金などの種々の活動に積極的に参加し、これらの体験を互いに分かち合う。こうして神学生は社会の中で弱い立場にある人々への心遣いを忘れず、⁽²⁷⁾彼らのために祈り、自らも質素な生活を心がけ、可能な援助の手段や問題解決の方法について考える。

4 困難を抱える家庭への配慮

「現代の家庭は、どんな共同体よりも、社会と文化の急激な変化のあおり」⁽²⁸⁾を受けて、種々の危機的な状況に直面している。教会は、このような現代の家庭、とくにキリスト者の家庭が抱えている困難に強い関心を示し、⁽²⁹⁾必要な助けの手を差し伸べたいと願っている。そのため教会は司祭に対して、困難を抱えている家庭や結婚の準備をしている男女に対する司牧的な配慮を大切にするよう呼びかけている。「家庭は、社会の生きた細胞としての使命を神から受けて」⁽³⁰⁾おり、キリスト者の家庭こそ、社会を福音化して行くための「原点」⁽³¹⁾だからである。

そのために神学生は、結婚と家庭についての聖書と教会の教えを学び、また、それらの倫理的な諸問題にも精通し、適切な助言と手段をもって対処するのみならず、信者の家庭そのものが宣教師となれるような司牧のあり方を目指して準備に励む。

5 アジアにおける日本の教会

アジアの教会についての特別シノドス（一九九八年）は、すべての人の救いに奉仕する教会のあり方を目指して、それぞれの国や地域、また種々の分野において、福音の文化内開花（インカルチュレーション）の推進を求めている。⁽³²⁾

そのために、日本の教会は、国内はもとよりアジアの諸宗教や伝統文化に対する理解を深め、対話と協力を大切にしたいと願っている。そして、それらのもとに見いだされ、福音に導く光となる「精神的、道徳的な富および社会的、文化的な価値を認め、保存」⁽³³⁾するよう励みます。こうして、日本の教会は、諸宗教や伝統文化の中にもみられる福音へと導く要素を識別し、教会の生活や活動の中に受容すること、「時にはそれを典礼そのものの中に取り入れる」⁽³⁴⁾努力を行う。

また、日本の社会においても多国籍の人々が出会い、異なる文化の交流や融合が進み、新たな文化が生まれる可能性も生じている。教会は、そこに福音の光をもたらし使命がある。

したがって、神学生は福音のインカルチュレーションの概念や諸宗教との対話の原則を学び、異なる国籍、宗教、文化をもつ人々との対話や協力を通して、福音を多くの人々の心に根づかせるためにふさわしい宣教師となるよう努力する。

B 新しい福音宣教の担い手として

教会は、それぞれの国や地域における社会の困難や諸問題に立ち向かい、社会を福音化していくために、「新しい情熱、新しい方法、新しい表現」⁽³⁷⁾を必要としている。確かに、「今日の新しい福音宣教」という司牧上の優先課題は、神の民全体に与えられたもの⁽³⁸⁾であるが、新しい福音宣教の中心的な担い手として、とくに現代の司祭には、次のような資質が求められる。

1 対話と交わりの精神

第二バチカン公会議は、現代社会の中で教会がその使命を遂行していくために、対話と交わりの重要性を強調した。教会は確信をもってキリストによる救いを宣言しつつ、教会を外に向かって開かれたものとするために、社会、⁽³⁹⁾宗教、⁽⁴⁰⁾文化との対話と交わりを推進し、そこに見いだされる「真実で尊いもの」⁽⁴¹⁾を大切にし、受け入れようとさえしている。

また同時に第二バチカン公会議の精神に従って、教会は従来⁽⁴²⁾の聖職者中心主義から脱却し、信徒とともに歩むあり方を目指して内的な刷新を行ってきた。そのために、教会の外部に対しても内部においても、現代の司祭にとつて、「とくに大切なことは、人々とかかわることのできる能力である」⁽⁴³⁾。

したがって神学生は、社会の状況にも目を積極的に向けて、開かれた姿勢を大切にしながら、神学院の共同生活においても、互いに心を開いて語り、ともに祈り、遭遇する問題を共有して討議し、協働する精神を培うようにする。

2 チームワークとリーダーシップ

現代の教会は、多文化共生、多分野にわたる司牧など、多様化するニーズへの対応が求められる。これらの事情を考慮すれば、司祭たちは共同で宣教司牧に従事する必要に迫られている¹³⁾。ともに祈り、対話し、助け合って活動する、すなわちチームで働ける司祭が今日ほど要求されている時代はない。このような対話と交わりの精神によって、司祭たちは自らの枠を乗り越えて働く奉仕者となり、また小教区の枠、教区の枠を越えて、日本のどこでも求められる場で働くことができるようになる。さらに、現代においては日本の枠を超え、とくにアジアをはじめ、他の開発途上の国々と連帯して働く司祭が求められている。

今日では、教会運営の奉仕や典礼奉仕にとどまらず、聖書の分かち合い、祈りのグループ、正義と平和のための市民運動との連携、高齢者や障害者とのかわりなど、さまざまな分野で信徒の奉仕活動が活発である。そのために司祭は、これらの運動や奉仕活動に理解を示し、必要に応じてチームを構成し、助言を与え、自分にゆだねられた共同体が、生き生きとした行動的な宣教共同体になるよう、

リーダーシップを發揮しなければならない。

そのために、神学生は、他者との交わり、討議、分かち合いを通して、チームワークで働く資質を磨く必要がある。また、神の助けを願って霊の識別を心がけ、神のみ心に従って共同体を指導する力を身につける。

3 多文化共生時代に

日本では、一九七五年以降ベトナム難民をはじめ、アジア、ラテン・アメリカなど世界各地からの移住信徒が増え、その数は日本人信徒数を上回る勢いである。こうして、日本の教会は、多文化共生という大きな恵みと挑戦を受けている。そのために日本の教会は、難民や移住信徒のための母国語によるミサ、カテケージス、秘跡の執行をはじめ、子どもの信仰教育、さらには信仰および生活上の相談に対応するだけでなく、心強いパートナーとして彼らとともに教会を築き、福音宣教に励み、また召命の発掘にも意を注ぐ姿勢が求められる。

それゆえ司祭職を志す者は、意欲的に多文化に触れ、多国籍信徒の司牧や典礼のために、その歴史、文化、習慣を学び、できれば必要な言語を習得することが望まれる。

4 歴史の中に神のメッセージを読み取る

神は人類の歴史を通して救いのわざを展開される。日本の教会の歴史は、宣教師によって蒔かれた信仰の種が、厳しい迫害の中で多くの殉教の実を結び、また信徒の力で保たれ開花した苦難と栄光を物語っている。一方で、かつて国外に追放された日本の司祭、修道者、信徒が東南アジアなどで、宣教師として活躍していた事実はあまり知られていない⁽⁴⁾。また、近代日本の歴史と教会の歩みにも目を向け、神の働きを洞察する必要がある。

現代のキリスト者、とくに司祭には、歴史の中で行われてきた神の働きを見つめ、驚嘆し、また歴史そのものが、二十一世紀の教会に投げかけているメッセージを読み取る感性が求められる。教会の歴史を見ると、人間の弱さによる闇の部分があることにも気づかされる。そのために司祭は、信仰の目で教会の歴史と向き合う必要がある。そして、預言者的な役割を果たせなかつた教会の現実に対して、謙虚に反省の目を向ける勇気をもつようにする⁽⁴⁵⁾。なぜなら、そこから教会の真の刷新が生じてくるからである。

司祭職を志す者は、日本の教会の歴史を学び、そこに見いだされる神のメッセージや教会の課題を読み取り、現代の教会に生かしていくために必要な準備を怠ってはならない。

第三部 養成課程

A 入学前の識別と予備的な養成

教会は、神学院における養成が効果的に行われるため、現代の状況を考慮して、神学院の養成に先立って十分な準備期間があることを望んでいる。⁽⁴⁶⁾ それは、神学院に入学する者に求められる資質、おもに「正しい意向、十分な人間的成熟、信仰の教えについての十分に広い知識、祈りの方法についての方向づけ、キリスト教的伝統に合致した習慣」⁽⁴⁷⁾ が、各志願者にどの程度備わっているのかを識別して、入学前に予備的な養成を行うためである。

このような入学前の識別と予備的な養成は、入学志願者を神学院に推薦する各教区の責任で行われるべきものである。そのために各教区は担当者置いて、神学院が提示する識別の基準を参考にしながら、ある一定の期間、入学前の識別と予備的な養成を行う。

B 入学後の養成

神学院では、司祭職に向けて歩む神学生の自己養成を基本として、それを成熟させるために人間的、霊的、知的、宣教司牧的な四つの側面からの養成が、六年間にわたって行われる。その養成課程は次のとおりである。

1 哲学課程（二年間）

哲学課程の一年目は初年度養成と並行している。

① 初年度養成

神学院で行われる養成全般へ入学者を導入していくために初年度養成が行われる。この初年度養成では、神学院での共同生活の規則、教科課程（哲学、神学、助祭コース）、宣教司牧実習、霊的生活に関する入門的な説明および指導が行われる。

② 哲学を中心とした学習

この期間には、おもに哲学の種々の分野を中心としながら、聖書入門、霊性入門、カテキズム、語学などの学習を行う。

2 神学課程（四年間）

哲学課程を修了し、各教区で、助祭・司祭候補者としての認定を受けた者が神学課程に進む。

① 神学科一年～三年

この期間には、おもに聖書学、教義神学、倫理神学、典礼学、靈性神学、司牧神学、宣教学、教会史、教会法などの学習を行う。この期間中に神学生はそれぞれ、神学科一年修了時に朗読奉仕者へ、神学科二年修了時に祭壇奉仕者に選任され、そして神学科三年修了時には助祭に叙階される。

② 神学科四年（助祭コース）

助祭に叙階された者、または助祭に叙階されることを教区司教によって通知されている者が神学科四年生として神学院での共同生活を送りながら助祭職を遂行し、司祭職への特別な準備のために設けられた助祭コースで学ぶ。助祭コースでは、これまでの学習を総括する神学総合演習、また宣教司牧現場で「神学する力」を深めるための講義をはじめ、司祭職を遂行するために必要となる実践的な知識を習得し技能を磨くために、実習や体験を通して学んでいく。

以上の哲学と神学の課程を修了した者が、教区司教の最終的な判断のもとに司祭に叙階される。

C 霊的同伴者の助けのもとに

父である神は、司祭となるために必要な霊性を研磨しようとする神学生に聖霊を注いで、召命の歩みを助け導いてくださる。司祭職への召命の基本は、神学生が真の同伴者である聖霊の導きに従いながら、自己養成に励むことである。⁽⁴⁸⁾ この内的な歩みの助け手として、各神学生は聖霊の望みが何であるのかをともに考え、祈り、助言する霊的同伴者をもたなければならぬ。⁽⁴⁹⁾

おわりに

日本カトリック司教団は、神学生が三位一体の神の招きと恵みにこたえて、聖母マリアのご保護のもとに召命の道を歩み続け、キリストの司祭となることができるよう、この養成理念と指針を具体化する養成課程とカリキュラム、および神学院での生活規則を編成して、日本カトリック神学院の養成者団、霊的同伴者、講師に、将来の司祭養成の任務を委託する。

二〇〇九年四月一日 日本カトリック司教団

父である神よ、あなたをたたえます。

あなたは限らない愛をもってすべての人の救いのためにひとり子をこの世に遣わしてくださいました。

御子イエス・キリストは、神の福音をのべ伝えながら、

将来の働き手となる弟子たちをみもとに集め、

親しい愛をもって教え導き、聖霊の力で強めて、

全世界に派遣してくださいました。

父である神よ、あなたをたたえます。

あなたは今もなお、この神の学び舎で、御子と聖霊の働きを通して、救いの奉仕者となる司祭の養成と派遣のわざを行ってくださいます。

この神の学び舎で、キリストのみもとに生きる神学生が、

聖霊に支えられて、自分の弱さと戦い、苦しみと困難を乗り越え、

キリストの満ちあふれる豊かさにまで成長することができましますように。

司祭の母である聖マリアよ、

この神の学び舎に集う神学生が

キリストの心を心として日々新たにされ、

新しい時代にふさわしい祈りの人、たゆまない福音宣教師、

よき牧者となることができるよう神に祈ってください。アーメン。

注

- (1) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成 (Pastores adbo vobis)』(一九九二年) 43―59参照。
- (2) 第二バチカン公会議『司祭の養成に関する教令』、教皇庁教育聖省『司祭養成に関する基本綱要 (Ratio fundamentalis Institutionis Sacerdotalis)』(一九七〇年)／教皇庁教育省『司祭養成における典礼教育指針』(一九七九年)／他：National Conference of Catholic Bishops, Norms for Priestly Formation, 2 vols., 1993／教皇庁教育省『社会的コミュニケーション・メディアに関する神学生養成のための指針』(一九八六年)／同、Directives on the Formation of Seminarians concerning Problems Related to Marriage and the Family, 1995.
- (3) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』12参照。
- (4) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』15参照。
- (5) 第二バチカン公会議『司祭の役務と生活に関する教令』2、6、同『教会憲章』10、28、教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』12、15、教皇庁聖職者省『司祭の役務と生活に関する指針』7参照。
- (6) 第二バチカン公会議『司祭の養成に関する教令』8。
- (7) 『教会の祈りの総則』4参照。
- (8) 第二バチカン公会議『司祭の養成に関する教令』8参照。
- (9) 第二バチカン公会議『教会憲章』28参照。
- (10) 第二バチカン公会議『教会憲章』28、同『教会における司教の司牧任務に関する教令』15、教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』17参照。
- (11) 第二バチカン公会議『教会憲章』28参照。
- (12) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』17参照。
- (13) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』17参照。
- (14) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』59参照。

- (15) 第二バチカン公会議『司祭の役務と生活に関する教令』6参照。
- (16) 第二バチカン公会議『啓示憲章』10、同『司祭の役務と生活に関する教令』4参照。
- (17) 第二バチカン公会議『典札憲章』10。
- (18) 第二バチカン公会議『司祭の役務と生活に関する教令』6参照。
- (19) 第二バチカン公会議『司祭の役務と生活に関する指針』55参照。
- (20) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勸告『現代の司祭養成』33、第二バチカン公会議『司祭の役務と生活に関する教令』6参照。
- (21) 第一回福音宣教推進全国会議(NICEE I '87) 公式記録集『開かれた教会をめざして』(一九八九年) 二五四頁。
- (22) 教皇パウロ六世使徒的勸告『福音宣教(Evangelii Nuntiandi)』(一九七五年) 17—19参照。
- (23) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに(Novo Millennio Invenite)』(二〇〇一年) 51参照。
- (24) 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『いのちの福音(Evangelium Vitae)』(一九九五年) 参照。
- (25) 第一回福音宣教推進全国会議(NICEE I '87) 公式記録集『開かれた教会をめざして』(一九八九年) 二五四頁。
- (26) 日本カトリック司教団『いのちへのまなざし』(二〇〇一年) 1—5参照。
- (27) アジア司教協議会連盟第5回・第6回総会最終声明『紀元2000年に向かうアジアの教会』(一九九八年) 四九頁(邦訳、カトリック中央協議会) 参照。
- (28) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勸告『家庭—愛といのちのきずな(Familiaris Consortio)』(一九八一年) 1参照。
- (29) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勸告『家庭—愛といのちのきずな』2参照。
- (30) 第二バチカン公会議『信徒使徒職に関する教令』11。
- (31) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勸告『家庭—愛といのちのきずな』43。
- (32) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勸告『アジアにおける教会(Ecclesia in Asia)』(一九九九年) 20参照。
- (33) 第二バチカン公会議『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』2。
- (34) 第二バチカン公会議『典札憲章』37。

- (35) 教皇庁典礼秘跡省『ローマ典礼とインカルチュレーション』（一九九四年）。
- (36) 教皇庁諸宗教評議会・福音宣教省『対話と宣言―諸宗教間の対話とイエス・キリストの福音の宣言をめぐる若干の考察と指針』（一九九一年）。
- (37) 第二バチカン公会議『現代の司祭養成』18。
- (38) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』18。
- (39) 第二バチカン公会議『現代世界憲章』2参照。
- (40) 第二バチカン公会議『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』2参照。
- (41) 第二バチカン公会議『典礼憲章』37参照。
- (42) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』43。
- (43) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』65参照。
- (44) H・チースリク著『キリシタン時代の邦人司祭』（キリシタン文化研究会、一九八一年）三七五頁参照。
- (45) 日本カトリック司教団『平和への決意』（一九九五年）参照。
- (46) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』62参照。
- (47) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』62。
- (48) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』69参照。
- (49) 第二バチカン公会議『司祭の養成に関する教令』8、教会法第二四六条第四項参照。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

キリシタン時代の司祭像に学ぶ ——付・日本カトリック神学院の養成理念と指針

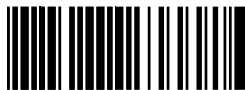
2009年11月6日発行

企画編集 日本カトリック司教協議会 常任司教委員会
発行 カトリック中央協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館内
☎03-5632-4411(代表)

印刷 有限会社ブリテック・ウィード

© 2009 Catholic Bishops' Conference of Japan, Printed in Japan
ISBN978-4-87750-150-1 C0016

乱丁本・落丁本は、弊協議会出版部あてにお送りください
弊協議会送料負担にてお取り替えいたします



9784877500016

ISBN978-4-87750-150-1

C0016 ¥200E



1920016052000

定価（本体200円+税）



日本カトリック神学院
東京キャンパス



日本カトリック神学院
福岡キャンパス